

[図画工作・美術]

主題を生み出し豊かに表現する力を育成する中学校美術科授業  
 - 制作過程における意見交流を用いた鑑賞活動の効果 -

木下 実菜\*

1 はじめに

(1) 美術科学習指導要領による目標

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」では美術科の目標の一つに「造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようになる。<sup>1)</sup>」という項目が設定されている。「造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え」「主題を生み出し豊かに構想を練る」とは、生徒が考えたことや条件などを基に、どのような思いをもってどのようなことを表現するのかを考え、その主題を踏まえて対象を再度深く見つめたり内面や本質を捉え直したりして、思いやよさなどを考えながら発想し構想を練ることである。

(2) これまでの取組

この目標に対して、美術の授業では以下のような取組を行っている。

- ①制作に関する内容の作品鑑賞
- ②鑑賞で学んだことを基に制作
- ③完成した作品をクラス内で鑑賞

各題材において、上記のサイクルを基本とし、授業を行っている。例えば、第1学年「レタリング」では、以下のような題材構想で取り組んだ。(全10時間)

- ①ポスターを鑑賞し、文字のデザインについて考える
- ②テーマに沿った文字のデザインを考え、制作する
- ③完成作品の鑑賞・制作の振り返り

一つの題材の中で、生徒が鑑賞と制作の二つの側面によって学びを深めることができるように指導を行っているが、主題を考え、それを基に発想や構想を練ることは、受け身ではなく生徒が自ら調べたりまとめたりすることが必要である。

制作では、概ね10～13時間程度を制作に充てているが、授業が進行するにつれて生徒間の進度の差が顕著になることがある。指導者からの個別の指導を必要とせず、自らの発想で構想を練り、スムーズに制作活動を進めることができる生徒もいる一方で、手が止まり、しばらく時間が経ってもそれ以降進めることが難しい生徒もいる。そのような生徒に声を掛けると、「どうしてよいか分からない」「どのようなものを描けば（制作すれば）よいのか分からない」という返答があった。

研究の実践を行う前に、3年生（95名）の生徒を対象とした美術の授業に関するアンケートを行った（表1）。

表1 美術の授業に関するアンケート

質問内容	肯定的評価の割合 (%)	否定的評価の割合 (%)
(質問1) 自分の気持ちや考えを、絵や形などで表すことが好きだ。	67.4	32.6
(質問2) 自分の思いついたことをもとに、工夫して表現することができる。	80.7	19.3
(質問3) 色の使い方や形のバランスなど、表現をよくするための工夫ができる。	75.9	24.1

\*柏崎市立鏡が沖中学校

以上の結果から、自分の作品をよりよくするために工夫しようとする生徒は7割を超えるが、自分の考えを表現することが好きな生徒は6割程度にとどまることが分かった。このことから、自分の考えを表現することに否定的な生徒にとっては、主題を考え、それをもとに発想や構想を練ることに困難さを感じやすいという可能性が考えられる。自身で主題を考え、作品をよりよくするために工夫する力を育成し、「思ったことを表現することは楽しい、好きだ」と生徒が感じることができる指導の必要性があると考えられる。

また、「どうしてよいか分からない」「どのようなものを描けばよいか分からない」という状態は、学習指導要領の目標で示されている「主題を生み出し豊かに構想を練る」能力がうまく発揮できていない状態であると考えられる。どのような思いをもち、その思いをどのように表現したいのかが思い浮かばない状態の生徒が制作では多く見られることから、生徒が自分なりに主題を考え、そのテーマを表現するためにふさわしい構図や画材、技法を検討し表現する能力を伸ばすためにはどのような方法が有効なのかを検討し実践を行うことで、生徒の制作への意欲向上を目指したい。実践にあたり、制作の意欲向上について巻口（2017）による実践・研究では以下のような結果が述べられている。

題材の過程に、試作品の鑑賞による「他者と対話する場面」「作品と対話する場面」本制作における振り返りによる「自己と対話する場面」を設けることで、生徒が新たな技法を獲得したり、思考が深められたりする姿が確認された。また、作品との対話によって、自分も試したいこと、試さなかった技法への関心が広がり、意欲向上が見られる。<sup>2)</sup>

このように、鑑賞活動において意見交流の場面を設けることで、表現の工夫への関心が広がり、制作への意欲向上が期待されることが、先行研究から示されている。一方で、筆者のこれまでの授業実践においては、作品完成後の鑑賞活動や振り返りは行ってきたが、生徒同士や作品との意見交流の場面を意図的に取り入れた鑑賞活動は行ってこなかった。そのため、対話を取り入れた鑑賞活動が、主題を生み出し豊かに構想を練る能力や、意欲向上にどのような効果をもたらすのかについて、実践を通して明らかにする必要があると考えた。

## 2 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

意見交流の場面を取り入れた鑑賞活動が、生徒が自ら主題を考え、適切な構図や画材、技法を検討し表現する能力の育成や、意欲向上に、どのような効果をもたらすのかを、授業実践を通して明らかにする。

### (2) 研究方法

#### ① 研究の手立て

題材の中で、対話の場面を取り入れた鑑賞授業を実践する。実践や制作を通して生徒の授業の様相を観察し、表現や意欲向上にどのような変化がみられるのかを考察する。なお、生徒の様相は、活動の様子やワークシートの記述、作品などから考察する。

#### ② 授業実践の対象学年と題材構想

第3学年（95名） 「いろいろな『私』を見つめて（自画像の制作）」

題材構想（全13時間）		
次	時	内容
1	1	自画像を鑑賞し、表現の工夫を感じ取ろう
2	2	自分の顔を描いてみよう
3	3, 4	〇〇な時の私／他の人から見た私 を見つめよう
4	5	テーマをまとめよう
5	6, 7	アイデアスケッチをまとめよう
6	8	いろいろな『私』を表現しよう
7	9	制作途中を振り返り、クラスメイトとアドバイスをし合おう
8	10～12	アドバイスをもとに、作品の完成度を高めよう（中間発表）
9	13	自分の制作を振り返り、クラスメイトの作品を鑑賞しよう

#### ③ 授業の主な手立て

巻口（2017）の実践では、作品の本制作に入る前段階として、試作品による鑑賞活動を行い、鑑賞の中のそれぞれの活動において、「対話」を重視している。それを踏まえて今回の実践では、本制作の途中である8時で鑑賞活動を行い、

対話の場面を取り入れることとした。制作の途中での鑑賞活動について、山崎（2019）の著書では「鑑賞で学んだことを表現に反映することができ、他者の考えを知ることによって自分の世界が広がる<sup>3)</sup>」といった効果が紹介されている。このことから、制作途中での鑑賞活動にも同様の効果が期待される。

授業実践では、8時の中間発表において、対話の場面を以下のように設けた。

ア 自己との対話：制作途中の作品振り返り

イ 他者との意見交流：小グループでの作品発表・鑑賞

ウ 作品との対話：クラス全員の作品鑑賞

まず、制作途中の作品について振り返りを行い、自身の進捗を確認したり、うまくいっている部分・クラスメイトから意見が欲しい部分を考えたりする（作品・自己との対話）。その後、小グループ内で作品を鑑賞し合い、作品について感想や質問をしながら、アドバイスをし合う場面を設ける（他者との意見交流）。最後に、クラス全員の作品を鑑賞し、普段関わりのない生徒も含め、より多くの作品と向き合う（作品・自己との対話）。「他者の作品を見に行く機会を作る」ことについて、山崎（2019）の著書では、以下のように述べられている。

制作の途中で全員の作品を全員が見に行く機会を設定します。（中略）「これから絵を見に行くのは、世界を旅していろんな世界があることを知るということに近いです。いろんな考え方や表し方、工夫などを見てみましょう<sup>4)</sup>」

上記のように、異なる考えや表現を学び、表現の工夫への関心を広げるための機会として、全員の作品鑑賞の活動を設けることとした。

### 3 授業の実際（8時で実施）

#### (1) 自己との対話：制作途中の作品振り返り

作品完成を100%とし、生徒自身が現在はどこまで進んでいるのかを把握するために、作品の進捗を%で振り返った。また、作品を客観的に捉え直し、制作途中の作品の現在のよさや、更により作品にするためのポイントを考えるために、うまくいっている部分とアドバイスが欲しい部分を記入した。実際の活動では、構図や配色、写実性などに着目しうまくいった部分や悩んでいる部分を記入する姿が見られた。

#### (2) 他者との意見交流：小グループでの作品発表・鑑賞

4人程度のグループを設定し、その中で作品やアイデアスケッチを見せ合い、(1)で振り返った内容を発表する。また、対話の記録が生徒の手元に残るように、鑑賞生徒はふせんに感想やアドバイスを記入することとした。

実際の発表・鑑賞では、「描き方がよく分からない」というコメントに対し「アタリをとるのはどうか。」「写真を撮り、模写するように描くのはどうか。」や「濃く塗りたい部分に対してどう塗るか迷う。」に対し「絵の具を重ねる」「画材を変えてみるのはどうか」など、鑑賞生徒は「自分だったらこうする」とイメージしながらアドバイスやコメントをすることができた。また、抽出生徒Aは主題の表現に対してアドバイスが欲しいと示し、鑑賞生徒も、よさを認めたり、アドバイスの結果をイメージしたりしながら、コメントをすることができた（表2）。抽出生徒Eは、技法について示し、鑑賞生徒は自分の経験から提案をしていた（表3）。このように、作品の主題や技法についての感想や提案を通して、主題の表現について深く考えるきっかけが生まれた様子が見られた。一方で、具体的なコメントや「自分だったらこうする」といったアドバイスが思いつかないため、「上手」や「誰かに聞けばよい」など抽象的なコメントをしているグループも見られ、小グループでの作品発表・鑑賞活動が活発にならなかった。

表2 抽出生徒Aの記述と、記述に対するアドバイス（生徒B, C, D）

記述内容（アドバイスが欲しい部分）		記述に対するアドバイス	
生徒A	「今の自分の感情」というテーマのためには、足りない気がする。	生徒B	陰影を追加して、シリアスな感じを追加するのはどうか。
		生徒C	たくさんの要素が散りばめられていて、様々な感情が伝わってくる。
		生徒D	青系の色を追加して、マイナスな感情を追加するのはどうか。

表3 抽出生徒Eの記述と、記述に対するアドバイス（生徒F, G）

記述内容（アドバイスが欲しい部分）		記述に対するアドバイス	
生徒E	どの画材で色を塗ろうか迷う。	生徒F	絵の具を薄く塗り重ね、ふわっとさせたらいい感じだった。
		生徒G	絵の具や色鉛筆もよいが、クレヨンも面白いと思う。

### (3) 作品との対話：クラス全員の作品鑑賞

1 作品につき25秒程度の時間を設け、クラス全員の作品を鑑賞した。鑑賞する中で、生徒は自分と似た発想の作品を見付けたり、自分とは異なる表現の作品を鑑賞したりすることで、より自分の考えを深めることができた。また、生徒の振り返りでは、「普段関わりのない人の作品を見て、様々な表現があることが分かった。」「全員の作品を鑑賞したことで、自分の作品と比べて考えることができた。」などの記述が見られた。この記述から、全員の作品を鑑賞することは、生徒にとって有効になったと考えることができる。

### (4) 生徒の作品と授業の考察

今回の対話活動が生徒にとって有意義なものであったかを確認するために、振り返りの肯定的評価（「そう思う」）がどの程度であったかを集計した（図1）。また、(1)で確認した作品の進度によって肯定的評価に変化があるのかを調べるために、各クラスの進度平均と照らし合わせた（表4）。

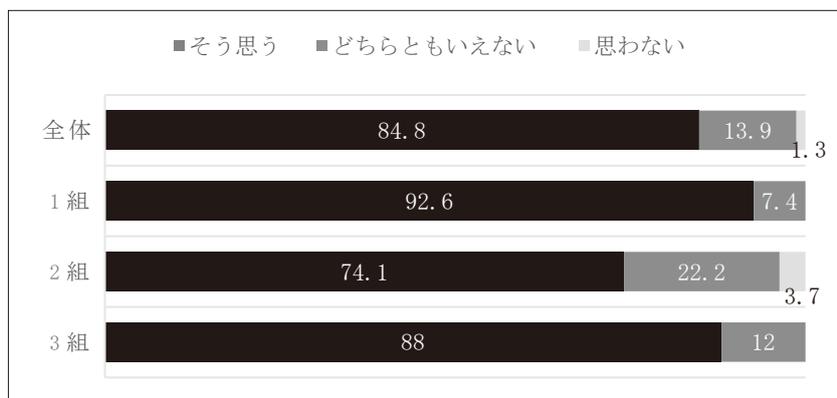


図1 振り返りにおける、「この活動は参考になったか、行ってよかったか」の割合

表4 クラスごとの進度平均と、今回の振り返りにおける肯定的評価の割合

クラス (組)	作品の進度平均 (%)	振り返りにおける肯定的評価 (%)
1	46.1	92.6
2	30.3	74.1
3	39.2	88.0

振り返りにおける肯定的評価から、全体的にこの活動は生徒にとって有意義なものであったと思われる。振り返りの記述においても、「参考になった」「よいアドバイスがもらえた」「他の人のアイデアを、自分の作品に取り入れてみたい」など生徒の制作意欲が高まった様子が確認できた。また、抽出生徒Aは「影をつけることを忘れていた。アドバイスを受けて描いていきたい。」と記述し、対話を通して主題の表現について捉え直すきっかけとなった。抽出生徒Eは「色鉛筆やクレヨンで違った印象を感じられるのがよく分かった。」などといった記述や完成した作品から、対話を通して表現の違いに着目するようになり、試行しながら主体的に制作を進める様子が見られた。対話を用いた鑑賞によって、生徒は様々な主題の捉え方や表現方法に触れることで、自身の主題や表現方法を見直す視点を獲得することができた。このことから、「豊かに発想し構想を練る」ためのヒントを得ることができ、表現の工夫への関心が広がったことが確認できる（表5）。そして、進度平均が高いクラスであるほど、今回の鑑賞での振り返りにおける肯定的評価も高くなる結果となった。活動中の様子では、アイデアスケッチを進めている生徒と彩色を進めている生徒の組み合わせなど、違う作業内容の生徒のグループもあったが、進度平均が高いクラスであるほど、鑑賞やアドバイスの時間が活発であり、振り返りにおける記述も、より充実した内容のものが多く見られた。

表5 表現への関心が広がったことが確認できる記述と、完成後の作品

	振り返りの記述	完成作品
抽出生徒A	<p>クラスの人から意見をもらって、様々な方法があると分かった。クラスメイトの作品を見て、「<u>陰影</u>をつけることを忘れていたので、<u>意見を受けて描いていこうと思った。</u></p>	 <p>中間発表を受け、顔面右側に、陰影の表現を追加した。</p>
抽出生徒E	<p><u>色鉛筆やクレヨンで違った印象を感じられることがよく分かった。</u>いろいろ試しながら進めていきたい。</p>	 <p>絵の具、色鉛筆、クレヨンなどを試し、色鉛筆で彩色することにした。</p>

#### 4 成果と課題

##### (1) 制作途中における鑑賞活動の有用性

本研究では、制作の途中での鑑賞活動を行った。授業の振り返りにおける全体の肯定的評価が84.8%であったことや、記述の内容から、今回の活動は生徒にとって有用なものになったといえる。また、抽出生徒Aは主題の表現について捉え直すことができたり、抽出生徒Eは表現の方法を試す意欲が見られたりするなど、他者の作品を鑑賞することで、表現してみたいテーマや試してみたい技法などのヒントを得ることができ、制作意欲の向上につながったことが読み取れる。

##### (2) 制作途中で行った、対話活動の内容

今回の鑑賞活動では、3つの対話の場面を設けた。自己との対話：制作途中の作品振り返りでは、生徒が自身の作品について進捗を考え振り返る場面を設けたことで、授業後の感想では「自分の作品について客観的に考えることができた。」という記述も見られた。また、進捗が80%と答えていた生徒は「作品を改めて見つめたことで、もっと丁寧に色を塗ろうと思った」といった記述をしており、今後どのように作品に取り組んでいきたいかを改めて考え直すきっかけになり、制作意欲が向上する様子が確認できた。

他者との意見交流：小グループでの作品発表・鑑賞では、対話活動が活発になったグループとそうでないグループがみられた。制作が進んでいる生徒ほど、「自分だったらこうする」という手段をイメージしやすく、アドバイスを受ける生徒も、具体的な意見をもらい自身の主題や表現について捉え直すきっかけになった。一方で作品に取り掛かることができている生徒は、具体的な手段をイメージすることが難しく、抽象的なアドバイスになってしまったと考える。例えば、自身の進捗が20%と捉えている生徒H（本制作には取り組んでおらず、アイデアスケッチに取り組んでいる）は、小グループ鑑賞において「よいと思う。」というコメントや、振り返りにおいては「いろいろな作品が見られてよかった。」といった抽象的な記述に留まってしまった。対話活動の際は、多くの生徒にとって有用な活動となるよう、各生徒の進捗を踏まえてグループの編成について工夫する必要がある。

作品との対話：クラス全員の作品鑑賞では、時間を区切って立ち歩き、クラス全員分の作品を見に行く機会を設けた。振り返りでは「普段関わらない人の作品も鑑賞することができ、自分の周りでは無かった技法に気付くことができた。」のような、違った表現方法に気付く記述が複数見られた。この活動を取り入れることで、気軽に他の生徒の作品を鑑賞することができ、1単位時間の授業の中で多くの作品を鑑賞し、表現への関心をより広げ、活動の意欲を高めることができた。

### (3) 鑑賞活動のタイミング

制作途中での鑑賞活動は有意義なものとなったが、進度によっては感想やアドバイスの交流が活発にならず、生徒にとって有用となるアドバイスが少なかったグループもあり、他者の作品を「鑑賞し、表現の工夫への関心を広げる」よりも「見て進度を確認する」のみの活動になってしまった様子も見られた。単に自分と他者の進度を比較するだけでは、生徒が主体的に作品をよりよくしようとする姿勢にはつながりにくい。したがって、生徒の進度や学習の実態に応じて柔軟に鑑賞活動のタイミングを設けることで、「豊かに発想し構想を練る力」を更に育むことができると考える。

## 5 考察

本研究では、「対話」の場面を取り入れた制作途中の鑑賞活動が、主題を生み出し豊かに表現する力の育成や意欲向上にどのような効果をもたらすのかを、授業実践を通して明らかにすることを目的とした。対話を取り入れた鑑賞活動は、生徒の主題表現や意欲向上に一定の効果をもたらすことが確認できた。

自己との対話の場面では、一度立ち止まって改めて自身の作品を振り返った。進度や「うまくいっている部分」「アドバイスが欲しい部分」という項目を設けて振り返りを行うことで、生徒からは「客観的に作品を考えることができた。」「作品を改めて見つめることで丁寧に色を塗ろうと思った。」などの記述が見られ、客観的に作品を捉える力が身に付き、意欲が向上した様子が確認できた。

他者との意見交流の場面では、制作が進んでいる生徒ほど、具体的な方法や効果を踏まえてアドバイスをすることができ、アドバイスを受ける生徒にとって、主題の表現や技法を捉え直すきっかけとなった。例えば抽出生徒Aは主題の表現方法についてアドバイスを受け、様々な方法の中から、陰影を付けることを選択し表現に反映させた。抽出生徒Eは技法についてアドバイスを受け、それぞれの技法を試行しながら選択し、制作に用いた。このように、他者の具体的な意見を取り入れることで、生徒の表現の幅が広がったことが考えられる。一方で、制作が進んでいない生徒が提案をしようとする、「自分だったらこうする」という具体的なアドバイスが思い浮かばず、抽象的なコメントに留まってしまった。この場面から、制作が進んでいる生徒にとっては、制作途中の鑑賞活動は表現の幅を広げ意欲の向上をもたらす有用な活動であったが、制作が進んでいない生徒は、アドバイスの場面では抽象的なコメントに留まってしまう可能性があるため、活動のタイミングやグループの編成、指導方法について検討する必要がある。

作品との対話の場面では、クラス全員の作品を鑑賞する時間を設けた。多様な表現に触れることで、表現への関心を広げることができた。生徒の振り返りからも、「普段関わらない人の作品も鑑賞し、新たな技法に気付くことができた。」という記述が複数見られ、表現への関心を広げ、意欲を向上させる効果があったことが読み取れる。

以上の結果から、「対話」の場面を取り入れた制作途中の鑑賞活動は、主題を生み出し豊かに表現する力の育成や意欲向上について、現在の制作を客観的に捉え直すきっかけとなったり、新たな技法に気付いたりすることで効果をもたらすという面で効果的であると考えられる。しかし、進度の差や活動のタイミングによって、一部の生徒が十分に効果を感じることができない場面も考えられる。どの生徒にとっても効果的な鑑賞活動となるために、進度や作品に応じた柔軟な指導方法や活動手段の検討が今後必要である。

## 6 引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』2017年、p9
- 2) 巻口礼子『意欲を持ち主体的に表現活動に取り組む生徒を育成する授業－美術における3つの「対話」を通して－』教育実践研究 第27集、2017年、p121-126
- 3) 山崎正明『美術の授業がもっとうまくなる50の技法』明治図書、2019年、p89
- 4) 同上書、p88